

しらかわの 身近な文化財

第二十六話

民俗芸能（神楽）

各地のお祭りや年中行事の際に奉納される歌や踊り、演劇などを民俗芸能といい、地域の中で永く伝えられているものもあります。

神楽は、神を迎えて慰めるために舞いや芸などを演じる民俗芸能のひとつです。面をつけて神々の姿になったり、剣や鈴などを持って踊ったりと、継承される地域によって形態はさまざまです。東北地方では、ユネスコ無形文化遺産に登録された、岩手県の早池峰神楽などが有名です。

白河の総鎮守である鹿嶋神社には、神社の祭礼や行事の際に奉納される「鹿嶋神社神楽」が伝えられています。現在では主に、お正月の元始祭、2月のだるま市、9月の白河提灯祭り、11月の新穀感謝祭のときに行われています。



▲鹿嶋神社神楽（だるま市）



▲芳賀須内の虫干し神楽

特に、だるま市では市の中心に仮設の舞台が設けられ、集まった多くの人が神楽の舞いを見物します。

また、小田川芳賀須内地区では「芳賀須内の虫干し神楽」が行われています。獅子頭を持ち、面をつけた神楽の一行が地区内の各戸をまわり、家の中を一巡して無病息災・悪疫退散を祈願します。

神楽の奉納は神との交流であると同時に、私たちの日常の暮らしに楽しみや華やかさを与える存在でもあるといえます。

こうした民俗芸能の継承は、地域の人びとのひたむきな取り組みによって維持されてきました。今に伝えられてきた地域の芸能を、鑑賞してみたいかがででしょうか。

文化財課 ☎ 2310



高齢者

Vol.69

あったか広場

高齢福祉課高齢者支援係 ☎ 5519

認知症になってもできること、
認知症に対してできること①

《体が覚えている》

認知症になると急に全てができなくなるわけではありません。これまで培った知識や印象深い出来事などは残っています。特に、家事や趣味、楽しんでやってきたことなどは、体が自然に動くほど、その人にしみついています。

環境作りは必要かもしれませんが、以前と同じことを同じように行えることは、とてもうれしく自信につながるものです。

《豊かな“こころ”》

認知症の症状は少しずつ進行していきます。しかし、感情はかなり末期まで残っているそうです。例えば、少し前の出来事を忘れてしまっても、ここがどこかわからなくなっても、悲しい、寂しい、嫌だ、うれしい、楽しいといった感情は感じています。また、感情の記憶は心に残りやすいものです。

いつもできていたことができなくなったつらさや不安、覚えのないことで注意された嫌な気持ち、自分らしさを発揮できたうれしさを生き生きと感じる心、そしてそれまでの人生を生きてきた誇りはもち続けます。

（認知症介護研究・研修仙台センター資料より抜粋）

認知症があってもなくても、
人から肯定されるのはうれしい
ものですね。

